日本近代建築史概観（Ⅰ）

山村　賢治（建築史学会員）

第一章 はじめに

我が国に西欧文化が渡来してきたのは、異論はあるかもしれないが、ポルトガル人の種子島漂着（天文12年・1543）が最初であり、その後キリスト教の伝来とともに九州や近畿の各地に教会堂が建つようになり、また、17世紀初頭に九州平戸にオランダやイギリスの商館が設けられるようになって、いわゆる西洋式の建築が次第に伝えられるようになった。しかし徳川幕府は寛永12年（1635）に鎖国令を発してキリスト教すなわち西欧文明の流入を断ったので、せっかく紹介され始めた西欧建築も、我が国の建築に影響を与えることなく中絶してしまった。その後は長崎の出島を唯一の窓口として細々と西欧の事情が紹介されるのみであった。安政5年（1858）幕府は開国に踏み切り諸国と修好通商条約を結んで、翌年から横浜・長崎・神戸などの開港場に居留地が設けられるようになり、ようやく本格的な西欧建築導入という、日本の近代建築の歴史が始まるのである。

第二章 初期の洋風建築

最初期の代表的住宅として長崎のグラバー邸（文久3年・1863）があるが、横浜、神戸の居留地には道路・緑地・下水道など都市としてのインフラの整備を伴ったものが計画されていた。横浜は関東大震災や第2次大戦中の戦災でまったく現存するものはないが、神戸の山の手にはハンセル邸（明治29年）、ハッサム邸（明治35年）、ハンター邸(明治40年)など優れた洋館が残されている。

新しい建築文明を受け入れる考え方として、材料や施工法といった技術を中心とする役所サイド（お上）の立場と、民間の大工棟梁たちの独特の姿勢が際立っている。お上は日本の近代化の歩みのなかで技術の発展や教育を指導し受け継いで、学会や高等教育機関を整備して日本の建築界の基本的な骨組みをつくっていくことになるが、一方、棟梁たちのつくる和様混合の建築様式は「擬洋風建築」と呼ばれ、従来の和風建築の技術を駆使しながら、洋風スタイルの建築を自由奔放に創り出していった。現存しているものでは松本市の旧開智学校（明治9年）が代表的なものである。そのほかにも、山形市の済生館病院（明治12年）のように、ドーナツ型の14角形の建物の正面部分に4層の塔屋をもつ奇妙な形の木造建築があるが、この建物の設計者は特定できていない。震災や戦災で失われたものがほとんどの東京で、三田の慶応義塾大学構内の演説館（明治8年）は慶応義塾建学のシンボルともいえる建物とされる。金沢市の尾山神社神門（明治8年）、奈良県生駒市の宝山寺客殿獅子閣(明治15年)なども、擬洋風建築では群を抜いて精緻な仕事である。

グラバー邸（文久 3 年）

済生館病院（明治 12 年）

尾山神社神門（明治 8 年）

明治初期の建築界において、お雇い外国人技術者と擬洋風の棟梁たちのほかに、旧幕府作事方で工事の経験を積んでいた下級役人が外人技術者の下で官庁工事の実際面を担当し、新政府の官僚技術者として実績を上げていたことも注目される。

第三章 お雇い外国人技術者

明治初期は、土木・建築に関する設計・工事指導はほとんどがお雇い外国人技術者に頼っており、鉄道建設、河川改修、港湾など土木関係が多かったが、建築関係では英人ウォートルスがもっとも目覚ましい活躍をしている。明治5年の大火後の銀座地区復興に欧米風の街区形成を取り入れたり、イギリス公使館（明治5年）の建築、皇居内道潅堀に架けた最初の鉄の吊り橋、大阪造幣寮の工場建設（泉布館（明治3年）が現存）など、万能技術者の面目躍如とした感がある。しかしながら、ウォートルスが正規の教育を受けた建築家でなかったことから、新政府が求めるようになった西欧様式の洗練された意匠や内部空間の装飾などをみずから計画し実行でき、しかもそれらを教育として次代へ継承させていける技術者を迎える方向へ進んできたこともあって、ウォートルスは用いられなくなり、代わって工部省は明治9年英人コンドルと契約し、実務のほかに工部大学校造家学科での教育を託すことになる。工部大学校では造家学科第1期生として、曾禰達蔵(24歳)、片山東熊(23歳)、辰野金吾（22歳）、佐立七次郎（20歳）ら、後に明治建築界の第一世代となる4人の若者が、25歳の新進教師コンドルを待ち焦がれていたのである。

コンドル（Josiah Conder）は1852年（嘉永5）ロンドンに生まれ、ロンドン大学で建築を学び、代表的な設計事務所で設計・監理の実務に携わり、在職中王立建築家協会主催の設計競技に優勝したこともある、将来を嘱望されていた青年建築家であった。

コンドルが特に高く評価される理由は、我が国にはじめて西欧の建築学の教育制度を導入し、日本人建築家を本格的に育てたからである。第1回生がさらに後進を育てていくに従って、コンドルの評価はさらに高まっていった。後に帝国大学工科大学になる工部大学校からは、第1回の辰野たちから第7回（明治18年）までに20名の建築家が世に出て、彼らが文字通り日本近代建築の第1世代として社会的な活動をはじめた。さらに、後には元老として第2世代を育てていく。

コンドルは明治・大正にかけて約70の建築を設計しているが、ニコライ聖堂（明治24年）、岩崎久弥邸（明治29年）、三田三井クラブ（大正2年）、島津邸（大正4年）などが現存し、最も本格的な明治建築とされている。

第四章 日本人建築家の誕生

帝国大学成立と同じ明治19年に造家学会が成立したが、その発起人26名のうち大半が工部大学校の出身者であるが、2名の異端者がまじっている。山口半六と妻木頼黄で、ともに工部大学校の卒業者ではなかった。山口は松江藩士の子で、東京大学の前身開成学校から第2回(明治9年)の文部省留学生としてパリのエコール・サントラールに学び、建築学を修めて14年に帰国した建築家である。妻木は旗本の子で、外国語学校から工部大学校に学んだが、中退して渡米、コーネル大学で建築学を修めて18年に帰国している。

山口は帰国後帝国大学理科大学本館（明治21年）、一高(明治23年)、二高（明治24年）、四高（明治24年）、五高（明治22年）などの学校建築を手がけて文部省営繕の源流をつくったが、明治

32年独立して設計事務所を開設し、主に関西で活躍した。

妻木は帰国して東京府に入り、明治19年臨時建築局から渡辺譲・河合浩蔵とともにドイツに留学、日本におけるドイツ流建築術の大家となる。後に内務省を経て大蔵省に移って官庁営繕の元締めとして活躍した。代表作として東京府庁舎(明治27年)、東京商工会議所(明治32年)、横浜正金銀行本店(明治37年)、日本赤十字本社(大正元年)などがあるが、神奈川県立博物館として現在使われている横浜正金銀行本店以外は既に無い。日本橋(明治44年)の麒麟など怪獣のドイツ・バロック的な装飾にみられる威厳に満ちた重厚さは、妻木の作風をよく表しているといわれる。彼は大蔵省営繕課長として官庁営繕を統括する立場で絶大な権力をふるい、国会議事堂建設計画がもちあがるや事務局側として、辰野らアカデミー派の懸賞設計競技論に抗し、結局は懸賞設計競技を実施して選んだ優秀な若い建築家を臨時建築局に迎え入れて、設計・監理をさせるというやりかたをとって昭和11年に議事堂が竣工するが、妻木はそれを見ることなく大正5年に58歳で世を去っていた。

旧島津邸(東京・大正 4 年)

旧五高(熊本・明治 22 年)

日本橋装飾(明治 44 年)

第五章 コンドルの弟子たち

コンドルから直接の指導を受けた第1世代は、明治12年11月工部大学校造家学科第1回卒業の辰野金吾、片山東熊、曾禰達蔵、佐立七次郎の四名である。ともに明治・大正の日本建築界の元老にふさわしい活躍を示したのはさすがであった。

(辰野金吾)唐津藩の下級士族に生まれ、藩の英学校に東京から教師として来ていた高橋是清に学んだ縁から、政界の高橋、のちに財界の渋沢栄一のバックアップを得た。工科大学校を卒業後、工部省からイギリスへ留学を命じられ、建築設計の実務を学んで明治16年に帰国。工部省御用掛、工部大学校教授、帝国大学工科大学教授・工科大学校長(工学部長)などを勤める傍ら、中堅技術者育成のため工手学校(現工学院大学)を設立して指導的役割を果たす。また建築学会会長に就くなど、教育・学界の要職を歴任して明治建築界最大の実力者として君臨した。辰野と官庁営繕の妻木頼黄、宮邸建築家の片山東熊の3人を明治建築界の3大ボスとみることができるが、教育を押さえていた辰野に他の2者は一歩をゆずる。明治36年後輩の葛西万司と辰野・葛西建築事務所を東京に、同38年には片野安と辰野・片野建築事務所を大阪に設け、設計の実務に精力的に取り組んだ。辰野は一貫して日本銀行に関係し、代表作である本店及び各地の支店を手がけた。東京駅は晩年の大作である。

（片山東熊）長州の下級武士の子として生まれ、維新戦争では兄とともに奇兵隊士として会津攻めにも参加した。工部大学校卒業後工部省に勤め、師のコンドル設計の有栖川宮邸の建築掛を命ぜられたのが宮廷建築家としてのスタートとなった。各地の離宮、宮邸、華族邸、博物館、記念建造物などを生涯造り続けたが、長州閥の山形有朋の後ろ盾と明治宮廷の権威のもとで当代一流の芸術家を動員することにより華麗な建物を次々に建てることができた。奈良国立博物館（明治27年）、京都国立博物館（明治28年）などがあるが、畢生の大作は赤坂離宮（明治42年）（平成20年国宝指定）であろう。

（曾禰達蔵）唐津藩主小笠原氏の小姓役を勤め、長州戦争では幕軍に参加して長州を攻めるが奇兵隊に大敗、その奇兵隊には12歳の銃士片山東熊がいたのである。その後幕府側として奥羽に転戦したが、藩主の命により会津から江戸に戻された。長じて建築家として大成した曾禰が、かって銃火を交えた片山の弔辞を書くことになる。曾禰は工部大学校を卒業後海軍技師として鎮守府関係の建築にかかわっていたが、コンドルの誘いで三菱に入社、コンドルを助けて丸の内赤レンガ街の建設にあたることになった。明治27年の三菱1号館はコンドルの設計であるが、2号館は曾禰がコンドルを補佐し、3号館以後は曾禰が担当した。やがて三菱を退き、後輩の中条精一郎と共同で曾禰・中条建築事務所を設けて建築設計・監理の仕事を続けた。慶応大学図書館（明治45年）はその事務所の最初期の作品である。その後三菱との関係もあって興隆期の日本資本主義社会を背景に大いに発展し、戦前における最大規模の設計事務所となり、建築家志望の大学生の憧れだったという。中条はデザインもさることながら、経営面にもいかんなく才能を発揮、建築事務所をビジネスとして成功させた最初の建築家と言われる。作家の宮本（中条）百合子は娘である。

（佐立七次郎）厳格な讃岐藩士の子に生れる。詩人金子光晴は義孫。

工部大学校卒業後、工部省、海軍省、一時民間（藤田組）を経て逓信省に入り、郵便・電信局舎建築研究のため欧米に出張するが、明治24年逓信省を辞して建築設計事務所を開設する。

明治30年日本郵船顧問を務めた関係で、残存する作品としては日本郵船小樽支店があり、また日本水準原点標庫（東京憲政記念庭園内）がある。性格が地味で、やや人づきあいが苦手な性格であったようで、面白いエピソードや特記する作品に乏しい。

日本銀行本店（明治 29 年）

迎賓館（明治 42 年）

＜参考文献＞

・日本近代建築の歴史　　村松貞次郎著 （岩波現代文庫）

・日本の近代建築　上（幕末・明治編）　下（大正・昭和編）　　藤森照信著 （岩波新書）

・日本近代建築大全 （東日本編・西日本編）　　監修：米山　勇　　撮影：伊藤隆之 （講談社）

日本近代建築史概観（Ⅱ）

山村　賢治（建築史学会員）

第六章 第2世代の建築家群像

明治19年（1886）発足した帝国大学工科大学造家学科の主任教授は、大学を去って民間人として設計監理業務をするようになるコンドルに代わって辰野金吾に引き継がれ、第一世代の日本人による教育が始まった。同年工部大学校卒業生を中心に造家学会（現日本建築学会）も創設。

造家学科時代（明治30年まで）の帝大を出た建築家の中では、26年卒の長野宇平次、27年卒の野口孫一が出色といえる。長野は日本銀行に技師として勤め、その後独立して建築事務所を開くが、古典主義様式のもっとも正統的な表現に最初に到達した日本人建築家と言え、現存の作品として独立後最初の三井銀行神戸支店（後の第一勧業銀行支店・大正5年）がある。野口は大学院・逓信技師を経て大阪の住友家に迎えられ、同僚の日高胖とともに住友関係の営繕を担当、関西の建築家を代表する存在となった。大阪府立図書館（明治37年）は住友家の寄付によるが、野口は日高と共同でこれをルネッサンス様式でまとめあげ、第2世代としての習熟した実際を見ることができる。武田吾一（明治30年卒）は大正9年創設の京都帝大建築学科の、佐藤功一（明治30年卒）は私大として最初に建築学科を設けた早稲田大学のそれぞれ創成期の主任教授として、多くの人材を育成しその人脈の頂点に君臨した。横河民輔（明治23年卒）は横河橋梁製作所・横河電機製作所の創立者で、また東洋陶磁のコレクターとしても有名な特異な経歴を持ち、いわば“図面を引かない建築家”ともいわれたが、部下の統率が巧みで、自分で設計する以上に十分に自分の意図を表現できた人だといわれる。作品として現存しないが帝国劇場（明治44年）、東京証券取引所（昭和2年）があり、帝大講師として鉄骨構造学の講義をするなど、日本の鉄骨構造建築の開拓者とされる。明治31年建築学科になって最初の卒業生の中に中条精一郎がいた。36年卒には妻木の後大蔵省営繕を総轄して国会議事堂をまとめた大熊喜邦、日本の耐震構造学の基礎を確立したといわれる佐野利器が、37年組には明治神宮宝物殿を設計した大江新太郎の名も見える。明治39年卒の岡田信一郎は東京芸大の建築科の伝統を築いた人でもあるが、東京歌舞伎座（昭和9年）、明治生命館（昭和9年）に見られるように、鉄骨鉄筋コンクリートを使った日本様式の建築でも、ルネッサンス様式のオフィスビルへの適合などでも、どんな様式でもこなせた鬼才であった。

大阪府立図書館（明治37年）

東京歌舞伎座（昭和９年）

明治生命館（昭和９年）

第七章　建築教育の系譜

大正初年までの建築家は、妻木や山口半六ら以外はほとんどが工部大学校及びその後進の帝

国大学工科大学造家学科（建築学科）出身に限られていた。京都帝大に建築学科が開設されたのは大正 9 年（1920）で武田吾一（明治 30 年卒）が主任としてその基礎を築いた。明治時代に建築の大学教育を開始したのは私学の早稲田大学で、明治 43 年（1910）の建築学科を開設し、大正 2 年に最初の卒業生を世に送った。初期の指導者は佐藤功一（明治 36 年卒）だった。旧制高等工業学校でみると、東京高等工業学校（現東京工業大学）は明治 14 年開設の職工学校から発し明治 20 年まで帝国大学の所轄となっていたが、同年東京工業学校として独立、さらに同 35 年東京高等工業学校に昇格し、明治 40 年から建築科の授業が開始された。初期の指導者は前田松韻（明治 37 年卒）。名古屋高等工業学校（現名古屋工業大学）は明治 37 年開設時から建築学科をもち、明治 41 年に最初の卒業生 16 名を世に出している。主任の鈴木禎次（明治 29 年卒）は東海地区の建築界をリードした人物であるが、夫人が文豪夏目漱石の妻と姉妹であったことから漱石の小説にしばしばモデルとして登場している。明治 22 年（1889）開設の東京美術学校（現東京芸術大学）に正式に建築科が発足したのは大正 12 年である。それ以前には図案科建築教室として、大沢三之助、古宇田実、岡田信一郎らの帝大出身者が指導にあたっていた。

いわゆる職長（フォアマン）の養成を図った教育組織として、前記の東京職工学校があるが、さらに明治 21 年（1888）築地に開校した工手学校（現工学院大学）が、早くから実力のある有能な人材を出していた。この学校は帝大出身の技師を補佐する工手（フォアマン）の養成を目的に、当時の帝大総長渡辺洪基を中心に、工科大学の教授らの出資によって設立された私立の夜学校で、辰野、片山、藤本寿吉（工部大学校第 2 回卒業生）らが文字通り手弁当で教育に当った。

明治から大正前半にかけての日本の建築界は、帝大出とそれを助けて実務に当った工手学校の卒業生がリードし、それらに名古屋高等工業、東京高等工業、早稲田大学、東京美術学校などの卒業生が順次加わっていったのである。神戸高等工業学校、横浜高等工業学校の建築科の開設はそれぞれ大正 11 年、14 年である。

第八章　建築論

＜黎明期の建築思想＞　東大42年卒業組（中村誠・薬師寺主計・児玉定次・後藤慶一・咲寿栄一・長谷部鋭吉・山崎静太郎ら16名）を中心に、分離派建築会が生まれる前の言わば黎明期に、芸術への純粋な憧れと同時に、新しい材料・構造の時代を迎えて、真剣に建築創造の方向を探求していた。なかでも代表的な存在である後藤慶二は卒業後司法省に入り、大正4年（1915）竣工の豊多摩監獄（後の中野刑務所）の設計者として日本近代建築史上に名をとどめている。さらに鉄筋コンクリート構造の研究を通じて、構造力学の本質を追究するとともに、それによる新しい建築の形はいかにあるべきか、その芸術性はどこに求められるかなどを真剣に考究している。

＜建築非芸術論＞野田俊彦の「建築非芸術論」とは大正4年東大卒業時の卒業論文の一部で、「建築雑誌」（大正4年10月号）に発表されたものである。これからの建築は芸術品でなく実用品であるべきだ、建築家は科学を基本とする技術家であるべきだと強く主張する、当時東大教授の立場で耐震構造建築学を講じていた佐野利器の考え方が一部に受け入れられ始めていた気運の中でもあったことから、この発表は建築界にかなりの衝撃を与え、彼は「非芸術論の野田」と言われるほど有名になった。しかし彼の非芸術論は、建築の芸術の否定的肯定であり、それは建築の機能

に忠実であり、無用の装飾を洗い落した合理性に、真の新しい建築の美が誕生するという考えに通じるものであったのである。

＜分離派建築会＞東大建築学科の学生6名（石本喜久治・堀口捨巳・滝沢真弓・森田慶一・山田守・矢田茂）が卒業直前の大正9年（1920）大学構内において同人習作展を開催し、「我々は起つ。過去建築圏より分離し。総ての建築をして真に意義あらしめる新建築圏を創造せんがために。・・・・・・・・・・・・・」という有名な分離派建築会の宣言をしたことに始まる。その活躍はほとんどが作品展と講演会に終始し、昭和3年（1928）第7回作品展をもって事実上終わったが、華々しい誕生はそれ以前にはなかったこともあって大きな反響を呼び、一般大衆には好意を持って受け入れられた。彼らは東大建築アカデミーが明治以来進めてきた西欧の建築様式を桎梏と感じ、分離すべき対象と見ていたのであるが、結局はまた新しい様式を取り寄せたと言えなくはない。やがて後から来るグループにその芸術至上主義を指摘され、乗り越えられてしまう。

＜表現派の諸派＞分離派の影響を受けて、社会意識を強く持った創宇社（大正 12 年）をはじめ、バラック装飾社（大正 12 年・今和次郎）、ラトー（大正 14 年・岸田日出刀）、メテオール（大正 14 年・今井兼次・佐藤武夫）、その他の小会派が結成され、大正から昭和初期にかけてモダンデザインの進展を活発に進め、いくつもの名作を生みだした。平和博覧会機械館（大正 10 年・堀口捨巳）、西陣電話局（大正 11 年・岩元緑）、早大図書館（大正 14 年・今井兼次）、楽友会館（大正 14 年・森田慶一）、東京中央電信局（昭和 2 年・山田守）、朝日新聞社（昭和 2 年・石本喜久治）、白木屋（昭和 3 年・同）などが比較的短期間のうちにつくられるが、小菅監獄（昭和 5 年・蒲原重雄）を最後に、ひとまず表現派の時代は終わる。

大阪市中央公会堂（大正 7 年）

旧早大図書館（大正 14 年）

大阪ガスビル（昭和 8 年）

＜ライト一門＞明治 26 年のシカゴ博覧会ではじめて日本建築に触れたフランク・ロイド・ライトは、日本の文化・美術に魅せられてしばしば来日（明治 38 年初来日）するようになり、帝国ホテルを設計することになる。その長い工事期間中、福原有信別邸（大正 10 年頃）、自由学園（大正 11 年）、山邑邸（大正 13 年）なども手掛けている。大正 6 年帝国ホテルの準備で来日したライトに押しかけ入門した遠藤新をはじめ、ライトのスタッフとして来日したアントニン・レーモンド、東大在学中に帝国ホテルの現場を見て感動し、卒業後すぐに事務所入りした土浦亀城、早稲田の夜学に通学中、英字新聞のスタッフ募集記事を見て入った田上義也、さらに岡見健彦などの俊英がライトのもとに集まり特殊な人脈をつくる。それらのなかから遠藤の甲子園ホテル（昭和 5 年）、加地利夫邸（昭和 2 年）、遠藤・田上の坂敏男邸（昭和 2 年）、岡見の高輪教会（昭和 7 年）、総

理大臣官邸（昭和３年・下元連）、日本麦酒ビヤホール（昭和８年・菅原栄蔵）などライト式と呼ばれる一群が出現した。

旧山邑邸（大正 13 年）

＜後期表現派＞大正末から昭和初期にかけて盛り上がった表現派の動きは昭和 3、4 年を機に一気に衰え、新たに一群の表現派作品が登場する。実例として村野藤吾の森五商店（昭和 5 年）をはじめ、大阪ガスビル（昭和 8 年・安井武雄）、日本劇場（昭和 8 年・渡辺仁）、宇部市民館（昭和 12 年・村野）、第一生命相互館（昭和 13 年・渡辺）など、盛期の表現派のような華やかさはないし、モダンデザインからの遅れを自認するようなものであったから、後期表現派と呼ばれる。このなかには和風住宅の流れも含まれており、盛期表現派の代表とされるのは藤井厚二の聴竹居（昭和３年）であったが、後期には吉田五十八の新興数寄屋が登場、杵屋熱海別邸（昭和 11 年）、吉屋信子邸（昭和 11 年）などが生まれ、伝統的な数寄屋造りに影響を与えながら、住宅・料亭・旅館の和風は新興数寄屋が主流となる。

＜日本のデ・スティル派＞オランダのデ・スティルに由来する箱とパネルによる凹凸の構成を日本に持ち込んだのはアントニン・レーモンドで、自邸（大正 13 年）が最初であり、その影響がまず分離派に現われ、堀口捨巳の紫烟荘（大正 15 年）や石本の白木屋（昭和 3 年）といった表現派作品にとり込まれ、また石本がデ・スティル作品として三宅つや子邸（昭和 2 年）を生む。これを契機として分離派はじめ表現派のデ・スティル化がはじまり、モダンデザインの主流は白と直角の美学に染まり、堀口の吉川元光邸（昭和 5 年）、徳川宗敬邸（昭和 5 年）、山口文象の朝日クラブ（昭和 4 年）、安井武雄の自邸（昭和 6 年）などがつくられる。また、この時期白と直角化に影響を与えたものにデ・スティルのほかにピューリズムがあり、レーモンドはフランスピューリズムのリーダーであるコルビュジェに刺激されてソ連大使館（昭和 4 年）、東京ゴルフ倶楽部（昭和 7 年）といった大作を生んでいる。デ・スティル派に続いてバウハウス派とコルビュジェ派が現れるが、この3派を日本の場合初期モダニズムという。

＜参考文献＞

・日本近代建築の歴史　　村松貞次郎著 （岩波現代文庫）

・日本の近代建築　上（幕末・明治編）　下（大正・昭和編）　　藤森照信著 （岩波新書）

・日本近代建築大全 （東日本編・西日本編）　　監修：米山　勇　　撮影：伊藤隆之 （講談社）

日本近代建築史概観（Ⅲ）

山村　賢治（建築史学会員）

第八章　建築論（続き）

＜バウハウス派＞バウハウスというのは、1919年ドイツのワイマール政権時代、芸術と工業の統一を目的にワイマールに創立された芸術学校で、創立校長には建築家のワルター・グロピウスが就き、1920年代の世界のモダニズム芸術運動の最大の拠点となっていた。1928年グロピウスが辞めた後をミースなどが継ぐが、1932年モダンデザインの無国籍性がユダヤ的であるとして嫌悪したナチスの迫害を受け、指導者の多くはアメリカなどへ逃れ、バウハウスは終わる。このバウハウスを日本の建築家として最初に注目したのは石本喜久治と堀口捨巳で、大正12年（1923）あいついでワイマールを訪れている。それ以後バウハウスは渡欧する青年建築家の定番訪問先となるが、特に滞在してグロピウスについて学んだのは水谷武彦、山口文象、山脇巌・山脇道子夫妻の4人である。水谷は入学（昭和2年）、山口はグロピウスの事務所にスタッフとして入り（昭和5年）、山脇夫妻は昭和5年ミース時代のバウハウスに入学するが、在学中にナチスにより学校は解散される。

昭和6年帰国した水谷は、翌年銀座に夜学の新建築工芸学院を開設、山脇夫妻を教授陣に迎え、さらに、土浦亀城、市浦健も呼んで、バウハウス流の総合性・体系生を重視したカリキュラムを組んだ。ここからは、桑沢洋子（桑沢デザインスクール・東京造形大学創立）、原弘（グラフィックデザイナー）、亀倉雄策（同）、勅使河原蒼風などが巣立っていく。山口は帰国後日本歯科医学専門学校附属病院（昭和9年）、日本電力黒部第2号発電所（昭和11年）といったバウハウス派の代表作を生む。バウハウス派は直接ドイツで学んだ者だけではなく、さまざまな建築家がそれぞれの経路から白い箱と大きなガラス窓に行きついている。表現派から来た山田守、石本喜久治、吉田鉄郎、蔵田周忠、ライト派からの土浦亀城。さらに、こうした転身組に加え、はじめからバウハウス派としてスタートする若い世代、たとえば谷口吉郎、川喜多煉七郎、山越邦彦、久米権九郎。後期表現派や歴史主義の新感覚派を本籍にもちながらの長谷部鋭吉、安井武雄、渡辺仁ら。

建築界の保守本流としての歴史主義派が、国の記念碑的建築や銀行、大型オフィスビルなどは離さなかったが官公庁建築の一部にはバウハウス派のデザインが浸透し、東京逓信病院（昭和12年・山田守）、大島測候所（昭和13年・堀口捨巳）、四谷第5尋常小学校（昭和9年・東京市）などの名品が残されている。バウハウス派は社会意識が強く、中小の住宅を機能主義、合理主義によって改良したいという志向を持っていたが、木造2階建て集合住宅や独立住宅を高密度に合理的に配置して良い環境の住宅地をつくることで、この方向は成果が見られ、山口文象の番町集合住宅（昭和11年）などが生まれ、単体ではなく白い箱に大きなガラス窓の町並みが実現する。

＜コルビュジェ派＞この派の源はピューリズム時代のコルビュジェではなく、コルビュジェに先行してオーギュスト・ペレ（フランスの建築家・コンクリート打ち放しをはじめて仕上げとして試みた）の打ち放しに目覚めていたレーモンドにある。レーモンドは自邸の打ち放しを入口としてペレへと深入りしたが、これを加速したのは事務所に迎えたベドジフ・ファイアーシュタインの影響が大きい。彼はレーモンドと同じチェコ人で、パリのペレの事務所で仕事をした後来日し、パートナーとしてレーモンドの事務所に入ったので、昭和初期のデ・スティル全盛期であっても事務所の作風は、ペレ風が

主でデ・スティル＋ピューリズムが従とする状態が続く。コルビュジェもペレのもとで学び、さらにデ・スティルに刺激されてフランスピューリズムの旗手として、エラズリ邸案（1930）やスイス学生会館（1932）などを手掛けてきたが、打ち放しを使ったのはレーモンドに大きく遅れたことになる。夏の家以後、レーモンドの作風はコルビュジェ色が濃くなり、日本で初めてコルビュジェの得意なピロティを採用した川崎守之助邸（昭和9年）、打ち放しのカーブした赤星鉄馬邸（昭和9年）などの代表作を生む。戦局が進んだ昭和12年、レーモンドは日本を去ってアメリカに向かい終戦の昭和20年まで帰ってこない。しかし、彼の播いた反バウハウス派の種は前川国男と坂倉準三さらに丹下健三に引き継がれ、着実に育っていく。前川は東大卒業のその日パリへ旅立ち、コルビュジェの事務所に入ってスイス学生会館などの工事に接し、2年後の昭和5年に帰国、ただちにレーモンドの事務所に入って、夏の家から川崎邸までの時期をスタッフとして働き、昭和10年に独立する。坂倉は昭和2年東大文学部の美学を出てパリに向かい、昭和6年から5年間コルビュジェの事務所で働き、昭和11年帰国して事務所を開く。戦時色が深まる中、鉄やコンクリート使用ができなくなり、彼らはレーモンドとコルビュジェから学んだ反バウハウス的空間を木造によって生み出していく。代表作として前川の岸記念体育館（昭和15年）、自邸（昭和16年）が知られる。丹下は卒業後直ちに前川の事務所に入るが、坂倉の事務所にも出入りして影響を受けている。昭和16年東大に戻り一人立ちするが、コンペしか表現の道はない時代で、戦前最後の四年間で三つのコンペに応募、周囲に目覚ましい印象を与えた。大正13年レーモンド邸に始まった新しい流れは、およそ20年して昭和17年、丹下健三という青年建築家を世に出して、ひとまず終わる。

第九章　終戦からの復興、そして高度成長期へ

＜廃墟のなかから＞

終戦直後の建築家として仕事がない時代にあって、戦中を生き延びてきた近代建築家による、乏しい資材を使った、贅肉をそぎ落としたような傑作が生まれ、若い建築家や学生たちに自分たちの迎えた時代に誇りと希望を抱かせるようになった。例えば新宿の闇市の真中に建った紀伊国屋書店（昭和22年）で、前川国男が終戦後最も早くカムバックしたのである。引き続いて前川の慶応大学付属病院（昭和23年）、坂倉準三の高島屋和歌山店（23年）、谷口吉郎の藤村記念館（22年）などが、戦後日本の近代建築第1号として登場し、戦前派の近代建築家たちが、その実力を持って復活し、輝かしい指導者として活躍を始めたのである。また、建設省が東京高輪に試作建設した公営の鉄筋コンクリートアパート2棟（21年～23年）は、戦後の公営アパートの先駆をなすものであった。一方、戦時の航空機・船舶などの軍需用の残材を転用して工場生産住宅（プレハブ住宅）の試作も各所で行なわれ、深刻な住宅不足に対応しようとした。前川国男の設計事務所（MID）が試作したプレモス（PREMOS）という名の組立住宅などは、その代表的なものであった。

＜新技術の学習＞

終戦を待ちかねたようにして日本に帰ってきたアントニン・レーモンドが来日早々に設計したリーダース・ダイジェスト東京本社（昭和26年）やアメリカ大使館員宿舎ペリー・ハウス（27年）の設計や工事は、鉄筋コンクリート建築の新しい傾向を日本建築界に示したものとして、衝撃をもって受け取られた。その構造の考え方、細部の処理方法などは戦前の手法とは全く異なった新鮮なものであり、

施工法も従来の建設業者の既成概念を覆すほど合理化され、機械化されたものであったので、この工事は実に得難い学習の場になったといえる。また、この昭和26年から30年にかけての時期は新材料と工法の集中的な導入が行なわれた。軽量コンクリート、ピーエスコンクリート、パイプ足場、各種ボード類、リベットに代わるハイテンションボルト、軽量型鋼など、その後の日本の建築技術を大きく変革した材料・技術が相次いで紹介されるのもこの時期であった。

この時期における坂倉準三の鎌倉近代美術館（昭和26年）は、戦前派による洗練された空間構成が、まだ乏しい資材の中で実現された佳作として記憶される。

新しいオフィスビルの本格的なスタートとなった日活国際会館（26年・竹中工務店設計施工）は、特にその基礎工法が称賛された。新しい構造とその造形の試みとして、特に鉄筋コンクリートのシェル構造は、その大胆な造形によって人々の目をうばった。この構造は1920年代にドイツ・フランス・スイスなどで試みられたものであり、日本では昭和26年に鶴見倉庫の直径40mの屋根（小野薫・加籐渉）に最初に試みられた。昭和28年松山市の愛媛県民館には丹下健三・坪井善勝の設計で、直径50mのシェルが架けられた。

そうした中で、清家清の私の家（29年）、大江宏の法政大学1955年館（30年）、村野藤吾の広島世界平和記念聖堂（30年）、丹下健三の広島平和記念館陳列館本館（30年）が相次いで竣工し、“戦後“もようやく終わりに近づいた感がもたれた。

しかし、昭和29年着工の佐久間ダムにははじめて米国製の施工機械が大量に投入され、戦後における機械化施工の端緒になったことを考えると、この時期はまだ学習期とせざるを得ない。

世界平和記念聖堂（30年）

平和公園原爆資料館（30年）

香川県庁舎東館（33年）

＜高度成長期の建築群＞

昭和30年代に入り、建築作品もようやく多彩になる。昭和31年にはコルビュジェのアトリエで学んだ吉坂隆正のヴィラ・クックウ、同年竣工の谷口吉郎らの秩父セメント第2工場や丹下健三の東京都庁舎などの、重厚でしかも奔放な造形が生み出された。昭和33年には丹下健三の香川県庁舎が竣工した。既に日本をリードする建築家として世界に名を知られるようになっていた丹下は、この作品によって日本に鉄筋コンクリートの構造が伝来して以来60年目にしてはじめて、その構造の日本的表現を獲得したと賞賛された。

30年代後半に二つの大きな懸賞設計競技が行われた。一つは国立劇場であり、他の一つは京都国立国際会館である。前者は竹中工務店が一等をとり、古くから実力を養ってきた建設業設計

部の実力を示した。後者は東大の丹下研究室で修業してき大谷幸夫のグループが当選した。

村野藤吾の日本生命日比谷ビル（昭和38年）は、建築の内外に装飾的な要素を豊かに持ち込んだ最初期の建築であったことから、このデザインを機能主義・合理主義からの反動とし、近代建築にたいする裏切りだとする批判を浴びたが、村野自身は「現代ビルにおける保守主義の発言をしたかった」と昂然としていた。その建物が街路や環境との調和に対する深い考慮がなされていることにより、保守が決して反動ではないことを雄弁に物語っている。

国立劇場（昭和39年）

国立京都国際会館（昭和39年）

日生劇場（昭和 38 年）

今井兼次の日本26聖人殉教記念施設（昭和36年）、吉村順三の森の中の家（37年）、菊竹清訓の出雲大社庁の舎（38年）、浦辺鎮太郎の倉敷国際ホテル（38年）、吉田五十八のいわゆる新興数寄屋の傑作新喜楽（38年）、と並んで、最後に丹下健三の東京カテドラル聖マリア大聖堂（39年）、東京オリンピック施設の国立屋内総合競技場（39年）がこの期の締めくくりとなる。30年代に多くの大作を残した丹下は、日本万博の総合計画及びお祭り広場（昭和45年）を頂点として、にわかにその作品を消してしまう。代わって海外での活躍が一層活発になるのだが、戦後復興から高度成長期の申し子であったのであろうか。

東京カテドラル（昭和39年）

国立屋内総合競技場（昭和39年）

＜参考文献＞

・日本近代建築の歴史　　村松貞次郎著 （岩波現代文庫）

・日本の近代建築　上（幕末・明治編）　下（大正・昭和編）　　藤森照信著 （岩波新書）

・日本近代建築大全 （東日本編・西日本編）　　監修：米山　勇　　撮影：伊藤隆之 （講談社）

日本近代建築史概観（Ⅳ）

山村　賢治（建築史学会員）

第十章　現代建築の潮流

＜昭和40年代以降＞

戦前から活躍してきた前川国男が埼玉会館（昭和41年）や埼玉県立博物館（46年）を発表、村野藤吾も日本ルーテル神学大学（45年）、興行銀行本店（49年）などの秀作を発表、さらに迎賓館（旧赤坂離宮）の改修（49年完成）を成功させて日本建築界での名声を確立した。なおこの迎賓館の和風別館は村野と並んで芸術院会員である谷口吉郎の設計である。

吉村順三の愛知芸術大学（44年）、横山公男の大石寺正本堂（48年）、岡田新一の最高裁判所庁舎（49年）などは、構造、架構の大胆な表現でそれぞれの記念性を強く表現したものである。材料選択や施工性で濃密な空間を得意としてきた白井晟一が、戦後の鉄筋コンクリート造寺院の典型として浅草の善照寺（33年）を設計し、また親和銀行本店（40～50年）では手作り的な設計態度が多くの共感をさそった。この時代のアイドルとして磯崎新が頭角を現し、群馬県立近代美術館（49年）、北九州市立美術館（49年）・同中央図書館（50年）の一連の作品は、箱形の幾何学的な空間を大胆に蛇行させるなど、明快な形態をとっている。丹下健三の弟子として、雄大な構想力に加えメカニズムに対する強さをもった黒川紀章は、海上都市計画（36年）をはじめ佐倉市庁舎（46年）、中銀カプセルタワー（47年）、福岡銀行本店（50年）などの実作がある。